

うつわが織りなす物語

Artist

福山 菜穂子 FUKUYAMA Naoko

筑波大学芸術専門学群
構成専攻クラフト領域 3 年

Writer

箕輪 佳奈恵 MINOWA Kanae

科目等履修生
(筑波大学大学院修士課程教育研究科 2 年)

自分が気に入ったもの・好きになったものを、「人にも教えてあげたい」と思う時と、逆に「わたしだけの秘密にしておきたい」と思う時がある。その基準が自分でもよく分からないのだけれど、とにかく、彼女の作品を見て「もっといろんな人知ってもらえたら」と思ったことが取材のきっかけだ。ようするに、彼女の作品のファンなのだ。

福山菜穂子さん。陶芸を学ぶ 3 年生である。取材のお願いに、「わたしでいいのかな…」とはにかみつつも、わたしの間に一つ一つ丁寧に、誠実に答えてくれた。

うつわから広がる

福山さんの日々のものづくりを象徴する作品がある。10 月の学園祭の個展「散歩道」で展示した、《おまたせ》《おはなし》《おはよう》、三つ一組のうつわだ。ほんのり黄味がかかった白色に、淡い紅色をぼかしたような優しい色合い、そして、手によ

くなじむしっとりとした質感の、あたたかな雰囲気をまとった作品である。その縁に、何羽かの小鳥がとまっている。三つのうつわ、それぞれで変化するその姿をながめていると、自然とお話が浮かんできて、まるで絵本の一場面を読んでいるかのような気分になってくる。《おまたせ》では、独りでいる小鳥の元に仲良しの 1 羽が飛んで来て、《おはなし》では、2 羽寄り添っておしゃべり。そして《おはよう》で、他のみんなも集まって、いつもの朝の井戸端会議が始まる…そんなお話だ。早朝、目を覚ました鳥たちが、1 羽、また 1 羽と集まってくる、何気ない日常の風景が思い出される。

「身近なものたちからかたちをさがし、それをうつわに落とし込むことを通して、うつわのまわりに物語が生まれるようなものづくり」。自身の制作を、福山さんはそう表現する。うつわのかたちをしてはいるけれど、単なるうつわにおさまらない、独特の世界があるようだ。

はじまりのうつわ

「前は、ほんとに普通のうつわをつくっていたんです。ロクロがおもしろかったので、まずは色・かたちをやってみよう、って思ってた」

その頃の作品を、見せてもらったことがある。抽象的な図柄のシンプルな小皿で、食器として毎日の食卓にそっと花を添えてくれそうな、かわいらしい作品だった。「こんなお皿欲しいなあ」と、素直に思ったことを覚えている。

転機が訪れたのは、2 年生の秋のこと。陶芸の授業で、石膏の割型を使って作品をつくる、という課題が出た。陶芸は、土の塊のままでかたちづくりと焼成の際に割れてしまうので、基本的に内側を空洞にしなければならない。そこで、塊のかたちを半分ずつ石膏で型取って割型をつくり、そこに板状の土を貼りつけて、それぞれを合わせることで、元の塊のかたちのまま中を空洞にすることができる。その工程で、半分になったかたちを見て、

福山さんはこう思った。「これをうつわの両側から付けてみたらどうかな」。出来上がったのは、うつわに四角い箱が突き刺さったかのようなかたちの作品だった（※《はこ》）。

それをきっかけに、「うつわに絵を描くとか、レリーフ状とかじゃなくて、立体をつけちゃうのがおもしろいかもしれない」と思いはじめる。そして、次に完成させたのが《3 つの夜》である。

「内側と外側があるとか、ふたがあるとか、取っ手があるとか。そういう、うつわならではの要素の中に、自分が興味のあるモチーフを組み合わせていくような表現をしたい」。目指すものづくりが、見えてきた。

「うつわ」にこだわるということ

うつわ、というかたち。茶わんやコップ、花器や急須など、その種類は様々あるけれど、「観るもの」「飾るもの」ではなく「使うもの」としてとらえられることのほうが普通だろう。しかし、福山さん自身は、あくまでもかたちとしてのおもしろさを追い求めたい気持ちが強い。つくりたいかたちが先にあるので、実用性を考えたりすることはあまりないという。

ただ、葛藤もある。「うつわのかたちだっ



《はこ》2011 年



《3 つの夜》2011 年

たら、誰でも『使うもの』ってすぐに発想するし、これを『オブジェだ』って言い張るのには無理がある気がして…」。うつわのかたちにこだわることで、「用途」の部分から抜け出しきれないでいるのだ。

もちろん、作品を使いたいと言ってくれる人がいるなら、使ってくれてもいい。でも、花器くらいならいいけれど、食器として使うとなると、洗いにくかったり装飾がじゃまになったり…きっとそんな不都合が生じてしまうことだろう。

「うつわ型のオブジェ、みたいなものなのか、使ってもらって使いやすいものにするのか、っていうのが、自分でもけっこう迷ってるところです」

悩みながら、探りながらの制作が続く。

つくることの意味

福山さんの出身は、東北の岩手県。先の震災で、甚大な被害を受けたところだ。実家がある盛岡は内陸のため、家族や身内は無事だった。しかし、心に受けた衝撃は大きく、それは自身のものづくりにも影響を与えた。

「建築の学生や先生たちが仮設住宅を建てに行ったり、あと、震災の場に行ってボランティアをしている学生がいたり。そういうのを見て、自分が芸術やってて具体的に出来ることってけっこう少ないな、（自分のやっていることは）別になくてもいいものだな、とか思ったりしました」。ものづくりへの価値を見出せず、しばらくは制作する気にもなれなかった。

連日のように伝えられる、被災地の惨状。何かしたいのに、自分には何も出来ない…そんな歯がゆい気持ちを抱いたのは、きっと彼女だけではないだろう。特に芸術は、それを生業にしている人は別として、なければ生きていけないものでもない。なくてもいいものを続けることに、一体何の意味があるのかと、心が揺らぐのもわかる。看護師や保育士など、人のために働く、人に必要とされる職業を志す友人が周りにいたことも、彼女の無力感を助長したのかもしれない。

「でも…」と福山さんは続ける。「なんか、生きる最低限に必要なことだけをしてても、やっぱり楽しくないじゃないですか。

プラスアルファで、感動したりとか楽しい気持ちになったりすることがあってこそ、生きがいみたいなことってあると思うので。だから、自分がそういうプラスアルファのところでがんばることに、別に意味がないわけではないかなって」。そう思い直し、今の自分がやるべきことを、いっしょうけんめいやろうと決めた。

この先のものづくり

震災のこともあって、卒業後は故郷・岩手に戻ろうかと考えている福山さん。けれど、陶芸と仕事を結びつけるということは、今はあまり考えていない。展示などの際に、作品を欲しいと言ってもらえることも多いが、それでも、それを売っていくということには正直ためらいがあるという。「自分がどういうフィールドでやっていくのか、まだ決めてなくて…。そんなに、売れるほどの自信もないし、量もつukれないので」と、あくまでも控えめだ。

そうはいっても、人に欲しいと思わせる作品をつくるということ自体、誰にでも出来ることではない。それは、うつわというものの身近さ・手軽さといった性格によるものなのかもしれないけれど、「うつわだから」欲しいと思えるというわけでもないだろう。使うか使わないかという問題はともかく、「自分のそばに置きたい」とたくさんの人が惹きつけられるのは、それだけの魅力や引力のようなものを、彼女の作品がもっているからなのだ。福山さんの作品に対して多くの人が抱くであろう、「親しみやすい」「かわいらしい」という感覚。考えようによっては「安っぽい」という評価とみることもできるのかもしれないが、ぜひともここは肯定的にとらえて、今のままの真摯なものづくりを、自信を持って続けてほしい。福山さんの作品が大好きな、一人のファンとしてそう願っている。

そんなわたしの思いをよそに、福山さんは「わたしが記事に載っちゃうなんて…」と、最後までではにかんでいた。